

《翻 訳》

カール・カウツキー「オーストリアにおける危機」^(訳注1)

太田 仁 樹
(岡山大学名誉教授)

1. 言語 (Sprache) と民族 (Nation)

民族的な諸問題 (nationale Probleme) の本性を理解することなしには、オーストリアの状況を把握することは不可能である。だが、それはそれほど簡単なことではない。つねに変化し複雑化する人間という存在の絡み合いから生ずる流れのなかに変わることなく存在する社会的な諸現象は、自然界の諸現象よりも把握するのが難しい。

例えば、ドレスデン決議^(訳注2)の起草に際しては、まさしく修正主義の本質を明らかにすることに注意しなければならない。それを理解しようとする人にとっては、社会現象について彼らを満足させるような定義を与えることはないだろう。例えば、資本家とプロレタリアのような、二つの非常に明瞭な現象を取り上げよう。われわれが、プロレタリアを、労働力の販売で生きている、すなわちその苦境のなかで買い手に利潤を与えるような価格で労働力を販売するよう強制されている無産者として定義し、産業資本家を、プロレタリアを搾取することで生きている、すなわち貨幣の所有と無産の労働力の存在によって労働力を購入し利潤を得るように使用し搾取する貨幣所有者として定義するなら、多くのブルジョア的経済学者は異議を唱えるだろう。ナンセンスだ。貯蓄銀行口座や株式あるいは国債を持っている数多くの賃金労働者がいる。これらもまた資本家である。そして、その経営において共に労働者と働く、すなわち労働者でもある資本家も少なくない。だから、この定義は適切ではない。資本家とプロレタリアおよびその利益の間には鋭い区別はない。扇動者や攪乱者こそがこれらの間に対立を巧みに引き入れるのだ、と。

同じような方法で説明する人々の主張によれば、同志たちを修正主義者と非修正主義者に区別することは、些細な違いについて若干の扇動者や攪乱者が宣伝する巧みに考えられた誇張である。

だが、毎日われわれは、資本家とプロレタリア、修正主義者と反修正主義者に会って、その対立を明確に感じている。

民族集団 (Nationalität) を把握するのは、修正主義と同様に困難であるが、その定義を承認することはより容易だろう。なぜなら、その存在を否定することに誰も利害を持たないからである。

どのような社会的協働にとっても前提であり、それゆえ社会そのものの前提条件である言語が、民族集団の最も重要な指標だと思われる。言語は最も重要な生産手段の一つである。精神的な生産、すなわち言葉でのみ考えられ、言葉を通じてのみ伝達され、社会的な財産となる理念の生産だけではない。それはまた物質的な社会的生産の手段でもある。生産は生産者相互の言語的意思疎通なしには不可能である。

だが言語は、人間を集約し分離する手段ともなる。われわれは言語の生成とそれを究極的に支配する法則をまだ知らない。だがわれわれは、その形成が厳密に合法則的なものであり、それゆえ同じ条件で同じ組織様式のもとでは同じ言語が発展したに違いないと知っている。だから、社会的な意思疎通と共同の食料獲得と共同の敵に対する共同の戦いを通じて結合する自然成長的な群れの範囲をはるかに超える社会的な連繋の手段が、言語において形成される。だが他方で、人種とその生活諸条件の差異によって生じる言語の差異は、すべての人類を動物界には存在しない個々の部分に分ける手段をつくる。同じ言語に通じている者は友人となり、それに通じていない者は他者となり、事情に応じて、無関心、侮蔑、軽蔑あるいは

憎悪が示される。人間を社会的に互いに近づけるすべてのものは、言語が本来一致していない場合には、言語が同化するという効果を生じさせる。言語のどのような同質性も再び人間を互いに社会的に近づける手段となる。こうして同じ言語を話す人間は、同じ社会的な組織——民族——の成員となる。

言語が媒介する伝統が社会的な結合のさらなる手段となる。言語形成以前には、個人の諸経験は個人とともに亡び去る。そして個人的な諸経験以外には存在しない。言語は個人的な諸経験を他者に伝え、諸経験を個別的なものから社会的なものにするのを可能にする。それは社会的なものになった諸経験を後世に伝えるのを可能にする。こうして、社会的な諸経験の総和によって、技術的な、またそれとともに社会的な進歩の基礎条件が与えられるだけでなく、異なった社会的組織の共通の喜びと苦しみについての後の時代の記憶を眠らせず、現代の諸関係が制約する民族的な結合を民族的な伝統によって強化する可能性をつくり出す。

このように言語は民族集団の最も重要な基礎条件の一つとなる。

だが、言語は基礎条件のうちの唯一のものではない。別の条件が付け加わるならば、例えば、アイルランド人の場合のように、民族集団が不利な事情のもとで言語を失った場合でさえ、独立して生活するのにそれで十分であるほどに意味があることはありうる。それにもかかわらず、それは例外である。特別な言語がなければ、特別な民族をつくることはできず、普通は維持することもできない。

だが言語は余りにも不確かな個人の指標であるので、言語共同体を基礎にして堅固な社会的組織がつけられることはない場合もあるかもしれない。異言語を受け入れ、自言語を忘れ、複数の言語を同時に話すこともある。それは一つの社会体にとって余りにも不安定な基礎である。社会体はつねに他の諸要因の上につくられるが、つねに言語は、言語共同体と社会的共同体がつねにできるかぎり一致するように、そのときそのときの社会的組織に適応するような努力を示す。

人間の社会を結合し組織する最初の堅固な紐帯は、血縁の紐帯、共通の先祖を持つ共通の血統の紐帯である。言語によってのみ、血縁共同体は動物的な群れの段階を超えて拡大することに成功した。動物的な群れは一定の状況のもとでの一定の拡大を超えることができなかった。後継者のさらなる増加はどれも問題外で、新しい群れを形成せざるをえず、母集団との関連を失う。人間の社会において、言語は子孫とその元の種族との間の関連を保持する紐帯を形成し、その紐帯は、それによって種族的同族性と共属性の感情を保持する。社会的組織が血縁的紐帯を基礎とするこの原始的な段階においては、人種 (Rasse) と民族はつねに完全に一致する。だが、われわれの近代的人種理論家が近代の諸民族を同じように観察するなら、それは全くのアナクロニズムである。

そうするうちに、人間の社会を結合する新しい紐帯が作用し始めるからである。人間が定住するようになると、その先祖が遺してくれた共通の領域 (Territorium) が彼らにとってますます重要になった。

血縁的紐帯が社会を結合している場合には、諸民族は相互に混じり合うことを免れている。諸民族がごた混ぜに入り乱れている場合には、しばしば移住が当然必要となるかもしれない。この段階では人間はノマド的であり、人口は希薄で、個々の社会的集団は互いにはるかに疎遠である。だから彼らは容易に互いに衝突を回避することができる。土地への移住が継続し人口密度が増加する場合には、それは不可能になる。そこで異なった人種の構成員の間の接触点が増えるほど、ますますそれは困難になるのだが、人種は、なお婚姻禁止とその他の法的な分離手段によって切り離しておくことが可能である。だが言語は、領域全体にとって統一的なものにならねばならない。支配的および被支配的な二つの人種が互いに対立している場合には、言語的な融合は非常に緩慢になる。だがそこでも、ついには社会的な必要が言語の同化を強制する。ノルマン人が11世紀にイングランドを征服したとき、彼らはフランス語を話していた。200年の間、それは貴族層とその王室の言語であり続けた。その後アングロ・サクソンの民衆語 (Volkssprache) のな

かに消えていった。他方、フランスではドイツ語が貴族と廷臣の言語を形成し、ロマンス語は庶民の言語だった。それが500年の間続いたが、ついに10世紀には、フランス全土でドイツ語は知られざる言語となった。支配人種は少なくとも言語においては被支配人種と融合した。それから後に、フランス語は逆にドイツにおいて廷臣と貴族層の言語として知られるようになったが、これは民族の最高の野蛮化と退化の時代にのみ可能なことであった。

ブルジョア社会と社会的交通が発展するほど、同じ領域に住む人間が同じ言語を話す傾向がますます強まる。資本主義的生産様式の出現は、一つの民族国家（Nationalstaat）で民族的領域（das nationale Territorium）を強固にする傾向を伴う。資本は、交通が全く自由な広大な内部市場を必要とする。しかしそれは、できるかぎり世界市場への自由な接近を必要とする。そこへの接近は、資本が属する国家が強力なほどより確実である。だが最強の国家は、民族的対立から生ずるあらゆる摩擦原因が排除されている民族国家である。民族的な国家では、内部交通も妨げられることが最も少ない——言語の違いが交通を妨げることは、関税障壁よりも小さくはない——。それゆえ、どの民族のブルジョアジーも、ある国家のなかでの民族のあらゆる部分を結びつけ、他方では自分の民族的言語をその国家における他のあらゆる諸民族に押しつけることに完全な利害を持つ。ここから生ずる脱民族化の危険は、ある民族の部分がその民族国家の外部にいる場合には、ブルジョアジーの経済的利害と国家権力の政治的利害に無関心な諸階級をも民族的な気分せざるをえなかった。

国家権力は統一した民族国家の建設に対してブルジョアジーと同じ利害を持つ。中世の国家は小領域の緩い結合であり、民主的・同輩団体的にさえ管理されるか、あるいは封建的に領主によって管理されていた。軍隊についても、どの領域も出兵分担数を規定していた。どの民族集団がこれら領域のそれぞれにいるのかは、国家の支配者にとっては全くどうでもよいことであった。それに対して、資本主義とともに、集権的な官僚制による国家行政、集権的な軍隊による国家防衛が出現する。だがそれは統一的な言語をあちこちで制約する。

他の多くの点でと同じく、ここではブルジョアジーの利害と政府の利害とが手に手を取り合っていた。もちろん、政府は、しばしば腐敗した貴族層の手にあり、かの利益共同体を十分に把握していないことがよくあった。

しかしながら、諸民族の発展は西欧では東欧と全く違った行程をとった。西欧では、近代的民族国家の結合が進んだのは、経済的・政治的な発展の全体がとっくの昔にその基礎を形成すべき大ききまとまった諸民族を形成した後である。せいぜいこれらの国家の幾つかの境界においては、あちこちに異質な要素が見受けられる。それはいうに足らぬほどのもので、フランスのピレネーにおけるバスク人、ニースにおけるイタリア人、ロートリンゲンにおけるフランス人、北部シュレスヴィヒにおけるデン人のように、国家の性格全体を傷つける可能性はない。だが東部プロイセンのポーランド人だけは、プロイセン王国がその東部でおお封建時代にいかに近いかの例証を形成している。

東欧においては、国家と社会が資本主義にとって成熟しているか否かを問うことのないように資本主義はながく要求してきた。資本主義は国家と社会を服従させ、その意味であらゆる進化論者を無視してそれらを転覆させた。資本主義的生産様式よりも革命的なものはない。ゆっくりと手探りで着実に、社会的発展のテンポとしてのみブルジョア的社會学者に可能なものだと思われるテンポで匍匐前進する資本主義よりも飛躍的な発展を可能にするものはない。電信、蒸気船、鉄道によって、資本主義的生産様式は、非常に遠くの荒野、アフリカの中心部や中国へと突き進み、若干の暴力的な突撃によって原始的な生産方法の領域から近代的な大工業の領域へ急迫する。資本主義は、労働者の諸要求に対して、理論の上でのみ緩慢で人目に付かない進化の弁護者である。実際には、その権力領域を拡張するという自分の諸要求の満足の

ために、その振舞いの突発性、迅速性、粗暴性において革命的に振る舞う。

だが、資本主義は荒々しい諸対立の上につくられた社会形態であり、それがもたらす社会的進歩は苦悩、労苦、闘争につねに結びついている。それらの苦しみは、新しい生産様式の出現が突然のものであるほど、より苦痛に満ちたものである。新しい生産様式が最も急速かつ飛躍的に発展させるものは、その諸要求であり、それを満足させる諸手段をずっと緩慢に成長させるのである。

例えば、資本主義とその技術とその民族の強国とともに大きくなる軍国主義がそれを示している。軍国主義は、すでに西欧諸国にとっては、その発展を阻害する重い労苦を意味している。米国においてこれまでそれが無いことは、米国がわれわれを凌駕する原因の一つである。にもかかわらず、軍国主義は西欧では大工業よりも急速に発展することはない。大工業は今なお軍国主義とそこから生ずる国家債務に耐える手段を提供している。資本主義と結びついた西欧強国の出現は、東欧——オーストリア、ロシア、バルカン諸国——にとっては、軍事的な力で西欧強国と張り合おうという熱望をもたらす。だが、近代的軍国主義は、近代的な大工業以前に東欧にやって来た。これらの国家は、強力な大工業を持つ西欧が取り除いた農民層と零細な小工業から諸手段を引き出さねばならなかった。西欧は農民を没落させたり、あるいは産業の発展を妨害し、ときには両方をおこなっていたのである。

資本主義的發展によって活性化されたナショナリズムは、東欧において軍国主義と同様な作用をする。

2. オーストリアにおける民族的問題 (Das nationale Problem)

われわれは、以下では通例オーストリアについてのみ話をする。だが、オーストリアについて語られることは、多かれ少なかれトルコとロシアの相当部分に当てはまる。

オーストリアに資本主義が侵入したとき、オーストリアは、統一した一つの民族を基礎とする状態から程遠かった。東欧の諸民族 (Völker) と諸民族断片 (Völkertrümmer) を結びつけたのは、トルコに対する闘争であった。18世紀にトルコの危険がなくなったとき、ハプスブルク君主国はもはや歴史的な使命を持たなかった。言語的・経済的な諸要素も、伝統的な諸要素でさえ、けっして帝国の様々な構成部分を結びつけることはなかった。18世紀における他の国家構造と同様に諸構成要素は同時存在を続けた。なぜなら、共通の官僚制と軍隊を持つ共通の王朝がそれらを支配していたからである。

個々の帝国部分の間の交通は非常に小さなものであったので、なお数世紀、共通の言語や共通の民族感情 (Nationalgefühl) を発展させることなく、それらを結合し続けることが可能だった。資本主義がオーストリアを強化して、その諸民族 (Völker) をまどろみから引き離し、民族的な統合 (nationale Zusammenfassung) への欲求を目覚めさせたときには、このようなことの始まりはけっして存在しなかった。西欧で国家建設を非常に助長し、諸国家を非常に強固にしたこの感情は、オーストリアにおいては解体的に作用し、諸民族と帝国諸部分の相互の闘争を燃え立せることができただけであった。

ここではそれについてそれ以上議論するつもりはない。わたしがかつて詳論した^(原注1)ことを繰り返すことができるだけである。ここでは、わたしが当時よく顧慮していなかった、そしてオーストリアの民族的な諸問題を (トルコのように) 先鋭化しその解決を困難にしている一要因にのみ言及すべきであろう。

かつて上記において、わたしは以下のように意見を述べた。定住の初期において様々な人種と民族の構成員がしばしば入り交じって住んでいること、一つのまとまった民族が一つの領域で発展して、そのすべてでそれを構成する諸要素の多様性が揚棄されるには数世紀が必要である。オーストリアは、その多くの部分で、文化的になお非常に遅れているので、まだけっしてこの段階を克服していない。オーストリアの諸民族は、まとまった関連を持つ地域にけっして住むことなく、しばしば互いに非常に多様に入り交じっ

て住んでいる。

例として、ここではハンガリー南部の三つの県（Komitat）について論じよう。

ティミシュ県（Temescher Komitat）では、諸民族集団は以下のように分かれている。ハンガリー人町村（Ortschaft）6，ルーマニア人町村124，ドイツ人町村60，セルビア人町村30，スロヴァキア人町村1，ブルガリア人町村1，チェコ人町村1である。トロンタル県（Trontaler Komitat）の222市町村（Gemeinde）のもとには、ハンガリー人市町村43，ルーマニア人市町村34，ドイツ人市町村67，セルビア人市町村63，スロヴァキア人市町村5，クロアチア人市町村4，ブルガリア人市町村6が数えられる。バーチ県（Bacser Komitat）では、ハンガリー人市町村38，ドイツ人市町村45，セルビア人市町村30，ルテニア人市町村2，スロヴァキア人市町村7がある（原注2）。

マケドニアでも似た状況である。例えば、そこでは以下のようなようである。

県	ギリシア人	ブルガリア人	イスラム教徒 (トルコ人と アルバニア人)	ワラキア人と セルビア人(原注3)	ジブシー	ユダヤ人
スコピエ	5036人	137184人	117781人	9831人	4208人	1570人
サロニキ	232621人	91708人	180735人	17494人	1670人	73455人

そして個々の県(行政地区)だけでなく、個々の町村においてさえ、個々の諸民族が互いに全く入り交じって住んでいる。例えば、スコピエ県（Sandschak Skopia）のクマノヴォ地区（Ortsbezirk Kumanovo）ではギリシア人87人，ブルガリア人21106人，マケドニア人11885人，セルビア人7623人，ジブシー477人である（原注4）。

これこそが、マケドニアにおいてトルコ人の地位が強い理由の一つである。ブルガリア人，セルビア人，ギリシア人が一緒になっていれば、彼らはすでにトルコ皇帝を脅かすことができただろう。だが、3種族（Volksstämme）のどれもがマケドニアを自分のものにしようとして、どの種族も他の種族を顧みなかった。そしてブルガリア人が立ち上がったとき、トルコ人とアルバニア人だけでなく、ギリシア人とセルビア人も彼らの敵であるのを、彼らは見いだした。

オーストリアにおいても、民族的な諸問題の解決は、諸民族の地域的な混在によっていかに困難になっているかは明白である。だが、民族的マジョリティのなかで生活して、彼らによって抑圧されている民族的マイノリティをめぐって非常に激しい闘争が生じることで、諸問題は先鋭化した。

そして奇妙なことに、オーストリアとトルコの経済発展は、他所でのように諸民族集団を強固にし、そのなかの他の諸民族にマイノリティを吸収し、まとまった領域を持つ諸民族を形成するのではなく、むしろそこでは諸民族がなお一層互いに入り乱れ、さらにまた新たなマイノリティを形成するように作用する。

資本主義がいたるところで必然的に生み出す内部的移動によって、経済発展はそれを達成するが、その間に資本主義は農民経済を近代的な文化と両立し難くして、同時に交通を容易にして、農村住民を近代的文化に親密に触れさせるのである。資本主義はそれによって近代文化への憧れ、都市への前進、工業への前進を生み出す。民族国家においては、この内部的移動がけっして民族的構造（nationales Gefüge）の変化を引き起こさないこともある。だが異民族の外国移住者はそこに吸収されるか、あるいは国民の本体（Körper der Nation）にどんな影響力も持たない他国人と見なされる。多民族国家（Nationalitätenstaat）では事情が異なる。内部的移動は諸民族集団の分布の恒常的な変動を引き起こすからである。それによる諸民族集団の混交と摩擦面の拡大は絶え間なく生ずる。

それについて例示として、ハンガリーの若干の数字を掲げる。そこでは個々の町村の民族的構成におい

て最近50年に以下のような変化が生じている。増減は以下である。

	増	減
マジダル人町村 ……	261	456
ルーマニア人町村 ……	162	64
ドイツ人町村 ……	168	116
セルビア人町村 ……	8	87
スロヴァキア人町村 ……	253	106
	等々	

この数字は諸民族集団の大きな地方的移転を示すもので、前進や後退を示すものではない。例えば、マジダル人町村の減少は人間の減少を意味するものではない。ハンガリーの経済的に進歩的な民族としてのマジダル人は（ドイツ人と並んで）最も離農にみまわれ、郊外と小都市からより大きな都市へ最も流れ込み、そこでブルジョアジーのますます大きな部分を——ドイツ人層を犠牲にして——形成している。ハンガリーにおいては、一部には、支配的民族があらゆる官職を独占し、経済生活においてもその民族同胞を庇護しているということによって、一部には、他の民族のブルジョアジーに上昇するすべての要素が支配的民族に従ってその優位を享受しているということによって、ブルジョアジーはますますマジダル化している。

マジダル人は、ハンガリーにおいて住民の少数派を形成している。それにもかかわらず、人はあらゆる方法でマジダル人であると申告しようと努力し、1900年の調書では、総人口1930万人で、870万人のマジダル人のみが表示されている。だが、ハンガリーの大学生では、1900年に、マジダル人として8070人、ドイツ人として562人、スロヴァキア人として132人が認められ、371人がルーマニア人で、31人がセルビア人であった^(原注5)。それゆえマジダル人は人口の45%を形成しているが、大学生では88%である。彼らと並ぶのは、なおドイツ人が考慮されるにすぎない（人口の11%、大学生の6%）。

それゆえ、ハンガリーの非マジダル人にとっては、マジダル人とブルジョアの概念は、20-30年前に帝国の西半分の非ドイツ人にとって、ドイツ人がブルジョアを意味したのと同様の意味を持つようになる。

もちろん、このことはマジダル人にはプロレタリアートがないという意味ではない。反対に、経済的に最高の地位にある民族として、マジダル人は今までハンガリーのプロレタリアートの闘争能力のある部分をも供給している。だが地方の非マジダル諸民族にとっては、その民族的闘争（nationaler Kampf）はますますブルジョアジーに対する階級闘争と同じものと考えられる。それは、民族的対立を深め、民族的憎悪を増大させることになる。

3. 二重制（Der Dualismus）

二重制の鋭い危機が、今やオーストリアの慢性的でますます複雑になる民族的危機になっている。それによって、その内部状況の混乱は最高度に上昇している。

1866年の破局の後、オーストリア政府はハンガリーに降伏し、彼らに内政的な事案のすべてに完全な独立を承認して、オーストリアの残りの部分と共通の軍隊と共通の対外政策によってのみ、なお結合することになった——それ以来、ハンガリーは帝国の西半分に対してつねに強者であることが証明されている。

ハンガリーが民族的諸闘争によってほとんど弱まることのないということは、確かに重要である。西部オーストリアは、主にハプスブルク帝国に打ち負かされる前からすでに豊かな民族的生活を知っている古

い諸民族から成り立っている。ドイツ人を例外として、彼ら——イタリア人、ポーランド人、チェコ人——はその民族の鎮圧あるいは細分によってオーストリア人になった。彼らの民族的伝統はすべてオーストリアとその支配的的民族であるドイツ民族に対立していた。彼らの民族的な生活は、資本主義社会がオーストリアで発展すると、すぐに活発に飛躍したに違いない。そしてこのことは、これらの諸民族においては、ハンガリーの被支配諸民族よりもずっと早く起こった。

後者のハンガリーの被支配諸民族は経済的に遅れており、スロヴァキア人のような歴史なき純粋な農耕民 (Ackerbauvölker) であったり、あるいはセルビア人のように歴史を持っていたとしても、ハンガリーの支配民族 (herrschendes Volk) であるマジャル人に対して極度に敵対的な伝統を持たなかった。マジャル人ではなく、トルコ人が彼らの民族力 (Volkskraft) を攻撃して、マジャル人はそのトルコ人に対して前線に立っていた。ハンガリーの非マジャル人諸種族 (Stämme) においては、民族的な生活 (nationales Leben) はゆっくりと弱々しく発展するのみであった。それまでマジャル人は好きなように振る舞うことができた。

だが、マジャル人は下に力があるだけでなく、上にも反抗的であることを示した。西部オーストリアの支配階級は、没落する小ブルジョア層の伝統になお非常にとらわれていて、上昇するプロレタリアートを恐れているブルジョア階級である。彼らは、民族的対立もあって、ドイツの支配階級よりも臆病で卑屈である。彼らは王室と貴族に反対して一致団結するのではなく、民族的に分裂していて、各民族のブルジョア階級は上からの恩寵を求める追従競争によって他民族のブルジョア階級を凌駕しようとする。

それに対して、ハンガリーでは政治的に重要な階級は、小貴族、ユンカー層である。彼らは、プロイセンでもよく知られている戦闘的で反抗的な階級であり、プロレタリアートを除いて、今日玉座の前で男子の誇りを示すことのできる唯一の階級である。そしてハンガリーでは、彼らが多数の強力なプロレタリアートに脅威を感じるほど、彼らの反抗はますます強固なものとなっている。

これらの階級および東方経済のあらゆる指標を持つユダヤ人層からリクルートされることの多い都市ブルジョア階級と官僚層は、もちろん申し分なく腐敗している。それは偶然の現象ではなく、合法的な現象である。

小手工業は、それがなお没落していないところでは、どこでも少なくとも誠実と義務の遂行に努めている。ブルジョア階級と国家行政は、彼らが強力な発達した小ブルジョア層から成長する場合には、最も腐敗から免れている。

それに対して地主は、都市にやってくると、容易に人倫的な拠り所を失う。このことは農民についても妥当だが、尊大な大土地所有者である貴族においてより妥当する。彼らはもともと国家を、管理すべきものではなく、略奪すべき獲物であると見なしている。

ブルジョア階級と官僚層は、強力な手工業を基礎として発展した小市民層からではなく、没落した大土地所有者とその子孫からリクルートされる。不思議なことに、都市と国家行政においては、騎士精神や同じ民族の農村住民の誠実さとは対照的な甚だしい腐敗が支配している。これについては、われわれはロシアやトルコからブル人に至るまで追跡することができる。ハンガリーにおいても、それは見いだされる。

だが、ハンガリーのブルジョア階級、国家行政、政治家の大部分も非常に腐敗している。マジャル人に譲れないのは排外主義だ。それはどんな腐敗より一層大きなものである。

だから、ハンガリーはその王に対しても戦闘的で反抗的である。

そのために、プロイセンのユンカーがドイツを支配し搾取するよりも高度に、二重制によってハンガリーはオーストリアを支配し搾取してきた。

従来、共通の必要のために、ハンガリーは30%、オーストリアは70%を支払わねばならなかった。それ

に対して、ハンガリーとオーストリアの人口は42%対58%であり、帝国の各半分が軍隊に送る新兵は同じ比率で分けられている。だが、軍事負担^(訳注3)は共通の支出の唯一のものである。1902年の帝国予算は、3億5800万クローネンの支出のうち3億4400万が陸軍と海軍に当てられた。その一部、およそ3分の1が関税収入から支弁され、残りは帝国両半分の分担金によって折半されている。悪名高い割当方法のために、ハンガリーは昨年の平均で一人当たり4クローネン、それに対してオーストリアは6クローネン支払わねばならなかった。

それゆえ二重制によって、近代的国家の重い負担の一つである軍国主義の負担は、ハンガリーにとって、非常に軽くされている。

だが同時に、対外政策全体、とりわけ通商政策は、君主国にとってその利益に奉仕するものである。帝国の西半分の工業は、製品に対して近隣の最良の市場をつくっているバルカン諸国に対する友好的な政策の必要性を知っている。だが、これらの諸国は農業生産物の輸出者でもあり、そのようなものとしてハンガリーの競争者でもある。だから、バルカン諸国に対する閉鎖、そして敵対の政策がなされれば、オーストリアの工業は破滅的になるが、その代わりにハンガリーの農業家の儲けは増加する。

それゆえ、これまでハンガリーは二重制から最大の利益を引き出していた。帝国の西半分は、そこから不利益をこうむったにすぎない。ハンガリーについては反対のことを期待することができただろう。西半分が二重制の放棄、君主国の両部分の完全な独立を決定的に目指していると考えべきだった。だが実際には、われわれは逆のことがおこなわれていたことを知っている。それはどのように説明すべきだろうか？

このことを理解するためには、3つの要因を考察する必要がある。王室の欲求、ハンガリーの工業、ハンガリーの非マジャル系諸民族の成長である。

経済的な後進性と民族的な伝統の欠如のために、非マジャル系の民族的感情とその民族的結合が帝国の西半分の対応する諸現象についていけないことを、われわれはすでに知っている。だが、彼らは覚醒しますます強くなり、マジャル人のヘゲモニーにとってますます危険になっている。マジャル人に対する民族的敵対のどれ程の量がすでにあちこちで溜まっているのかは、クロアチアにおける最近の騒動がはっきりと示している。だが、この増大する民族的な感情は、境界越しの藪篭みではいつも見られるものではない。ハンガリーの非マジャル人にとってより差し迫って簡単に実現できることは、二重制の廃棄、すなわち一つのまとまった帝国への再結合によって、マジャル人の優越を打ち破ることである。連邦主義的に組織された全体としてのオーストリアによる二重制の克服が、必ずしも公然と語られることのない、だが事実上目指されている彼らの目標である。

だが、ハンガリーが独立し、マジャル人層が国家権力のあらゆる諸力を自由にすることに制限がなくなり、武力によってマジャル人層を少数派にするような国家に再び押し込めるような試みに対抗することが可能になるほど、非マジャル人の目標を達成するのは難しくなる。それに非常に都合が良いのは、独立したハンガリーの軍隊のために努力することである。従来ハンガリーの連隊の保持のためには、君主国の西半分が相等の金を出していたのだが、ハンガリーが独力で負担しなければならなかった。

ハンガリーで大工業の創設に向けて努力することは同様な意味を持つ。工業を持たないことはその民族の資本主義的に発展した民族への経済的な従属をもたらすので、どの民族も自分の資本主義的工業を持つとする。だが、支配階級が発展した大工業の前提条件をつくるために文化活動をおこなうこと、とりわけ人民大衆の生活水準の向上によるプロレタリアートの知的向上と内部市場の拡大をもたらすことは滅多にない。ハンガリーでもそうだが、たいていは資本主義は、農村住民を貧困にし、彼らからリクルートされるプロレタリアートの退化とともに始まる。だが、そのような状況のもとでは、先進的な外国に生まれているような大工業は発展しない。だからどの場合にも、支配階級にとって、保護関税は高度な文化を広

めるよりも、工業を促進するのに非常に確実で都合な手段と思われる。だから、ハンガリーも、二重制が君主国全体の対外通商政策を完全に彼らの支配下に置いていたにもかかわらず、なお独自の関税境界に憧れている。

しかし、君主国全体に対する最大限の独立に向けて努力する場合、彼らは王朝の利益に対立することにならざるをえない。支配者の権力は、それ以外の同じ状況のもとでは、彼らが自由にする国家権力が統一的でまとまっているほど大きい。フランツ・ヨーゼフは、ケーニヒグレーツの破局の後に初めて二重制を承認した。そのときでも、少なくとも軍隊と関税境界が共通であるという前提があった。この共通性がなくなり、帝国の両半分の純粋な人格的結合が現れると、今日では王朝の力が減退するだけではない。それは一つの強国の支配者から二つの小国の支配者になり、両半分の間で軋轢が生ずるや否や、王朝そのものの存続が两部分のどちらかで危うくなるからである。帝国两部分の間の対立において、君主はより攻撃的でより不穏な半分に与せざるをえなくなる。君主は、今以上にハンガリーの囚人になり、外国の代理人という役割を果たし、また外国の代理人として扱われるという、ハンガリーで起こりうる最悪の事態に身をさらしたくない。

だが、ハンガリーの非マジャル諸民族が強力になり、マジャル人の反抗に反対し、連邦同士として王冠に奉公する能力を持つようになるほど、王朝とマジャル人との利害の対立はますます切迫したものになる。統治する皇帝が皇位継承者^(訳注4)に代わるや否や、対立は個人的な諸理由からも切迫したものになることがあるかもしれない。フランツ・ヨーゼフは年老いて、政治的・個人的性質の一連の非常に厳しい運命の打撃に身を屈していた。彼はもはや暴力的な抗争を好まず、1866年以降一連の価値ある譲歩をおこなって、ハンガリーに人気があった。ハンガリーは30年間全く満足していた。皇位継承者は、その支配力のどのような制限に対しても憤慨して反対する癩癪持ちである。ハンガリーは、彼からより大きな独立に向けた努力のための非常に鋭い闘いを、まさに努力の精力的な促進を期待せざるをえない。それは、人格的結合の結果によってだけでなく、統一的な、連邦的にはあれ組織された一つのオーストリアを再建することで、二重制を克服しようとするものである。マジャル人は、それによって例えばチェコ人やポーランド人ほど重要ではなくなるかもしれない。

だが、この見通しはすでに今日の状況を先鋭化したものである。非マジャル系部族集団（Völkerschaft）の民族感情の強化だけでなく、期待される支配者個人の変化がマジャル人に示しているのも、マジャル人が何らかの新たな独立を獲得するなら、おそらく10年でマジャル人の立場が現在よりもずっと悪くなるかもしれないということである。いまマジャル人が古い支配者から奪い取るのに成功していないものを、新しい支配者から獲得することはないだろう。

抗争全体のなかでの王冠の態度と同様、マジャル人の態度は理解しやすいものである。非常に理解しにくいのは、西部オーストリアにおけるドイツ人政治家のマジョリティの態度である。彼らは選挙権によって特権を付与されている階級の大衆を代表している。

彼らが、オーストリアからのハンガリーの分離を重い荷物を振り払うものとして歓迎したに違いないと考えることもできる。まさにドイツ人およびチェコ人が二重制の費用を負担せねばならないのである。まず、彼らこそがハンガリー人の主農派的な通商政策のもとで苦しんでいる工業的に最も先進的な地域に居住していることによって、次に、彼らが共通の軍隊を維持する税の大部分を支払うということによってそう考えられるのである。

1899年の一人当たりの支払いは以下のようである。

帝室直属地（領邦）	直接税 クローネン	消費税、入市税 クローネン	タバコ（独占）支出 クローネン	総計
ニーダーエスターライヒ	31.65	17.12	18.27	67.02
オーバーエスターライヒ	11.65	6.39	8.62	26.66
ザルツブルク	11.79	10.31	10.97	33.07
シュタイアーマルク	10.48	5.55	8.04	24.07
ベーメン	10.68	17.30	9.27	37.25
メーレン	10.14	21.81	6.88	38.83
シュレージエン	9.17	27.00	11.06	47.23
ガリツィア	3.53	5.12	3.69	12.34
プロヴィナ	3.95	4.61	4.00	12.56
ダルマチア	2.69	0.90	2.45	6.04
帝国全体	10.52	11.48	8.05	30.05

この不平等な負担の配分がそれほど悪くないのは、それが富の調整を招来する場合、農業地域の文化的な向上、学校、交通路の改善、土地改良等々のために、工業地域からのより大きな収入を使用する場合である。それは、プロレタリアートの、民族の枠を超えた連帯（internationale Solidarität）の立場からだけでなく、ブルジョアのエゴイスティックな商業的観点からも引き合う政策であろう。なぜなら、それは遅れた農村地帯の文化的向上によって内部市場を拡大するからである。

だが、富裕な地域からの収入のすべてが、モロク神（訳注5）のように残虐な軍国主義を育成するためだけに使われるなら、事態は違って来る。その場合、この地域は吸い尽くされ、疲弊し尽くして、後進地域のための最小の利益もなく、工業の躍進は阻まれ、その地域は工業的な地域よりもなお経済的に零落する。

1899年ツィスライタニエン（訳注6）の国家支出から文部省に6022万5000クローネン、農業省に4200万5000クローネンが当てられた。それに対して共通業務（軍隊）には2億5050万5000クローネン、それと別に特に防衛省に4904万1000クローネン、したがって3億クローネンが当てられ、国家債務の利子支払いに3億3984万2000クローネンが当てられた。

オーストリアのドイツ人は、今日の状態を維持することに少しも利益を持たない。それは、彼らにとってそれ自身すでに全く耐え難いものになっている軍国主義の重荷の重要な強化を意味している。チェコ人と並んで、ドイツ人は、次のように叫ぶ理由があった。ハンガリーとは別れよう！

だが、しばしばあることだが、オーストリアのドイツ人——すなわち、その政治的に特権を持つ階級——は、今度も甚だしく目先がきかないことを示した。より高い歴史的観点からみれば、全く見通しがきかず狭量な動機から、彼らは自分の利益が切実に要求する発展に逆らっている。

資産階級が特権を持つ今日の選挙制度のために、オーストリアの代議機関における言語間の闘争、一般に民族集団間の闘争（Nationalitätenkampf）は、民族間（Nationen）の闘争ではなく、その上層の闘争にすぎない。だが、後進性と停滞のために、この階級の末裔は営業活動によって前進する機会が少ししかない。そこで国務や自治体の職務、概して公務は英国やドイツにおけるよりもずっと大きな意義を持つようになる。「知識人」、ブルジョアのおよび農民的な末裔の大逃避が生ずる。そして、彼らにとって、農民と小市民が没落したとき、資本主義的発展の停滞にもかかわらず、オーストリアの実情に応じてその意義が増大した。というのは、大経営が出現すると小経営を打ち壊すというのが資本主義的生産様式の法則なので、大経営が足場を持つことができる場合には、今日どこでも小経営は繁栄するとはいえないからである。事情によってどんな有利な生産も不可能になるところでは、大経営は役に立たない。だがそこでは小経営も零落する。オーストリアはこのような素晴らしい経済状況にある。

だが、国家、領邦、市町村は、経済的な停滞によって追い込まれる多くの競争者全員にとっての場所ではなく、このように役職——教師、裁判官、行政官僚、将校——をめぐる少数の民族の野蛮な闘争が生じる。ドイツ人、せいぜいドイツ語話者が、以前はこの地位を独占していた。今では、非ドイツ語地域においては、彼らは市町村および地方の職務、さらに下部の国家官職からさえ押し出されている。彼らはますます激しくドイツ語の軍隊言葉に固執する。少なくとも軍隊では、ドイツ人将校が優勢で、ドイツ語話者だけが勤務につくのが許可されるべきであるとされているからである。

だが、両親が他のところで就職させることができないドイツ人青年のために将校の地位を留保しておこうという考慮と並んで、「現実政治」的性質の顧慮がドイツ人政治家を規定している。彼らは追従競争で他の諸民族を打ちのめそうと望み、ドイツ人にだけその権限がうまく保護されていること、ドイツ人だけが信頼できる従僕を演ずること、それゆえ王冠はドイツの要素を保護し大切に理由があることを、王冠に実証しようと望んでいる。

彼らは何も学ばず、何も忘れない。実際、政治家はけっして支配階級の意を汲むことで譲歩を得る必要はどこにもない。そうすればオーストリアにおけるように破産する。最も忠実な民族ではなく、最も反抗的な民族が、1848年以来最も多くの譲歩を得ている。その民族は、ハプスブルク家王朝が統治するのを止めるべきだと当時説明していた。そして必要な場合には、この同じ説明が繰り返される可能性がある信じられている。それに対して王冠がその忠誠を無条件に頼みにすることができたあの諸要素は——オーストリアや他のところで——つねに拙い取引をする。

民族の枠を超える (international) オーストリア社会民主党はドイツ人の有産階級とは違っている。それは数年来、一般に多民族問題 (Nationalitätenfrage)、特殊には二重制の問題について明快で決然たる綱領を持っている。第一の問題についての内容は、諸民族の自治 (Autonomie der Nationen) である。もう一つの問題については、帝国の両半分の分離、現在の雑居状態の廃棄である。雑居状態は両半分に窮屈にしている、そうでなくともすでに複雑にされている国家の民族的な諸対立を人為的に複雑にし、先鋭化する摩擦面をつくる以外の何の役にも立たない。

社会民主党の綱領は、オーストリアの多民族問題の現実的な解決を意味する唯一の綱領である。だが、それは社会民主党だけが代表するものであるから、プロレタリアートがオーストリアの政治権力を奪取しなければ、その実現の見通しはない。というのは、共通の軍隊と官僚制を持つ集権的強国としてのオーストリアの解体、スイス化、すなわち、そのなかで小さなカントンや地区および市町村の最高度の自治が支配するような諸民族集団の連合 (Bund von Nationalitäten) への転換を意味するからである。

そのような変化は、古いオーストリアを打ち壊す革命によってのみ成し遂げられるだろう。だが、一度死んだオーストリアをもう一度新たに生き返らせよとするのに誰が関心を持つだろうか？ オーストリアの存立は今日では当惑の産物であり、内的必然ではない。オーストリアが存続するかぎり、その住民、すなわち社会民主主義者もオーストリアを生命力のあるものとして形成しなければならない。なぜなら彼らもそこで生活しなければならないからである。だが古いオーストリアが破局あるいは消耗に斃れるなら、その諸要素は自由になり、新しい共同生活のために努力するどころか、古い歴史ある諸民族の構成部分であるドイツ人、ポーランド人、イタリア人は、できるだけ分離するだろう。残余の部分も近隣の民族的に近い諸国家に併合されるか——ルテニア人、ルーマニア人、セルビア人——、あるいは自分の国家形成を試みるか——チェコ人、マジダル人——あるいは最終的に、新たなオーストリアを諸民族の自治に基礎づけるのかを、ここで説明することはできないだろう。なぜならそれについて何かを予見するのは不可能だからである。それは、南ヨーロッパの民族混沌 (Völkerchaos) が最終的な民族的確定 (nationale Konsolidierung) に達する、簡単でも平和的でもないプロセスである。

だが、今日の体制が持続するかぎり、いずれにせよオーストリアの多民族問題（Nationalitätenprobleme）の決定的な解決、あるいはまた二重制の危機の解決は不可能に思われる。暫定的なことができるにすぎず、重要な民族的諸問題（nationale Fragen）を世界からなくすることはできない。反対に、社会的諸対立と同様、民族的対立もますます先鋭化するに違いない。

ここでもまた、ブルジョアの世界は、もはやその固有の本質の帰結をあえて引き出そうとしないことになる。法的平等と政治的自由の建設と同様、諸民族の民族国家への集団化と集約もその課題である。だが、社会的諸対立の頂点から生ずるあらゆる歴史的諸問題と同様、近代の大国家におけるこの問題も、新たな形成の障害を排除する破局を通じてのみ解決されうるものである。戦争と革命のなかで民族国家はつくられる。それにもかかわらず、今日ではブルジョア社会は非常に腐敗しているので、もはや政治的な破局に耐えることができない。それはどのような解決にもひるみ、差し迫ったものであっても、どのような解決をも先送りする技術を呼び出す。解決は、勝利者が自分の意志を完全に実現する事ができるような破局を通じての実現されうるものである。

だが、古い問題の解決を留保することが広く知られるほど、最終的な破局を受け入れねばならない範囲はより大きなものとなり、古い問題を複雑にし、対立を深刻にする新しい問題が、古い未解決の問題とますます一緒にになり、次の大破局において勝者に課せられる任務ももちろんますます大きくなる。

発展がこのようにして起こるのを望む理由は全くない。なぜなら、発展はわれわれの能力に対する諸要求を最高に高めるからである。だがこのような願望は、あらゆる偶発事に対応するために従わねばならない発展の現実の成り行きに対して、われわれが盲目であることを許すものではない。

今日の国家においてすでに多民族問題（Nationalitätenfrage）が最終的に解決することほど、オーストリア社会民主党にとって好ましいことはありえないだろう。社会民主党の活動は、それによって無限に容易になるであろう。だが、ブルジョア社会の無能さに付ける薬はない。わたしは、かつてはプロレタリアの階級闘争の成長が異なった民族のブルジョアジーを互いに接近させると期待していた。だがこれまでは、この期待の反対が実現している。われわれが一般に認めることができるように、闘うプロレタリアートが前進するほど、ブルジョア世界がますます分裂している。社会民主党の大きな勝利はこの分裂を一時的に克服し、われわれの敵を反動的大衆に連合させることができるが、その最後のときが近づくのに気づくということがなければ、反動的大衆は長い間つながっていることはできない。オーストリアのわが同志たちは、つねにますます激しくなる民族的な混沌のなかで、敵の攻撃に対してだけでなく、民族的潮流の上げ潮と反動的なプロレタリア層そのものの内部での対立に対しても、不断に戦わねばならないという宣告を受け続けている。それは苛酷な仕事であるが、にもかかわらず、その明快な綱領と〔民族〕和解思想の堂々たる防衛によって、民族の枠を超えた連帯の旗を堅持することにこれまで成功してきた。そして、そのような社会民主党は将来も成功することであろう。

《原注》

- 1 Karl Kautsky, *Der Kampf der Nationalitäten und das Staatsrecht in Oesterreich*, *Die Neue Zeit*, Jg. 16, 1989, S.515ff., 557ff. u. 723ff. 「オーストリアにおける国家をめぐる諸民族集団の闘争と国法」太田仁樹訳、『岡山大学経済学会雑誌』第49巻第2号、109-124頁。
- 2 S. Radó, *Das Deutschtum in Ungarn*, Berlin 1903, Puttkammer & Mühlbrecht, S.16 u. S.17.
- 3 スコピエ県ではセルビア人、サロニキ県ではワラキア人。
- 4 Cleanthes Nicolaïdes, *Makedonien*, Berlin 1903, Calvary & Co., S.25-27.
- 5 Radó, *a.a.O.*, S.51.

《訳注》

- 1 本稿はKarl Kautsky, *Die Krisis in Österreich*, in *Die Neue Zeit*, Jg. 22, 1904, S. 39-46 u. 72-79の翻訳である。
- 2 1903年のドレスデンで開かれた社会民主党大会で、ベルンシュタインの修正主義を否定する決議が採択された。
- 3 原文はHerreslastenであるが、Heereslastenと解した。
- 4 皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の甥のフランツ・フェルディナント (Franz Ferdinand: 1863-1914)。1896年に皇位継承者 (Thronfolger) に認定された。通例、皇太子 (Kronprinz) ではなく、このように呼ばれた。1914年6月28日サラエヴォで暗殺された。
- 5 子供を人身御供にして祭られたことで知られる古代の中東の神。
- 6 ライタ川の此岸。ハプスブルク二重君主国のうちハンガリー王冠領を除いた諸邦のことを意味する。オーストリア帝国と呼ばれることもある。